

# 生活者としての視点からみた障がい者用衣服の考察

## －改良着の試着を通して－

木俣 光江（介護学）

### はじめに

今、介護分野は目覚しく変化している。介護保険等の制度をはじめ、身体介護の負担を回避する為の介護機器、介護技術、障害にあった介護方法など枚挙に暇がない。家政学分野においても介護関連の数々の施策、方策が実施されたり、検討されている。その一部を以下に列挙る。

### 住居

- ・福祉住環境コーディネーター
- ・リフォームヘルパー
- ・バリアフリー化
- ・シルバーハウジング
- ・高齢者共同生活支援事業
- ・住宅改修支援事業
- ・福祉用具の貸与
- ・介護保険制度における居宅介護住宅改修費等の支給（手すり、滑らない床、段差、スロープ・ドア改修、トイレ改修）

障害を持った場合や加齢の為に体力低下が起きた場合、要支援や、要介護に認定された場合に在宅生活を成り立たせる為の方策や介護予防のための改築、福祉機器、用具の提供、及び情報提供、相談機関が上記のように盛り沢山ある。

### 食事

- ・管理栄養士（介護保険による栄養指導加算）
- ・介護食士（全国調理職業訓練協会）
- ・嚥下困難食（ソフト食、ペースト食、ミキサー食、きざみ食）
- ・バイキング形式（平常の一斉メニューの配膳ではなく幾つかの料理から自分で選ぶ）
- ・行事食（正月膳、土用の丑、誕生会）
- ・外食（専門食レストラン）
- ・食事のための自助具（ピンセット箸、片麻痺用スプーン、フォーク、皿、コップ）

生きる力である食事に関しても障害に応じ自立に向けて使いやすい工夫がなされている。自立

や介護の省力化は勿論、食文化の継承、食べる楽しみを助長させる工夫を施設、在宅を問わず求めることが容易な状況である。

### 被服

- ・つなぎ服、紙オムツ
- ・介護保険（紙オムツ）
- ・改良服介護服、（負担軽減が主目的、楽しみの追求）

ユニバーサルデザインの研究としては岐阜県製品技術研究所が下記の研究を行なっているが、ほとんど製品化されていない。

- ・2000 年高齢者障害者のコート他
- ・2001 年高齢者向けワンピースとケープ、脊椎損傷者用ズボン他
- ・2005 年高齢者の障害者の扱いやすいボタンの考案

2005 年以降はユニバーサルデザインの研究はなされていない。

被服関係においては介護者本位の介護のしやすさ、始末のしやすさに視点を置いたものである。つなぎ服（拘束禁止の法律制定以後は減少）やオムツは利用者の尊厳を傷つけるものでありながら、安易に使用されている現状がある。利用者は自分の好みの衣服を着用できる喜びが欲しいと思っても介護者サイドでの選択になることが多い。実習で施設訪問したときや TV で介護場面を見たときなどに障害状態に合った服装や利用者の尊厳を保った服装、個性に合った服装に出会うことが少ない。実習巡回時、ある施設で薄クリーム色の上下（パジャマとおぼしき上着とズボン）を着用した集団に出会った。施設入所者の制服かと思ひ職員に尋ねるとショートステイ利用者に貸与しているとのこと。一週間から一ヶ月程度の短期の利用者の所持品は職員にとって見覚えがなく紛れ込むことも多い。たとえば、認知症利用者が持ち去りどこか

においてきても職員は見覚えがないため持ち主不在になることがある。ショートステイ利用者には施設利用開始前に持ち物すべてに必ず記名するようお願いするが、家族は記名せず持参することもあり、トラブルの原因になる。それを防止する為、持参した物は使用せず、ショートステイ終了時、利用当初着用してきた衣類や物品すべてをすぐに返却できるように施設の衣類や物品を使用する。またショートステイの利用者の行動パターンの把握をする為、遠目にも分かるように施設の衣類に着替えてもらい、自宅から持参したものはすべて保管庫へ収納しトラブルの防止を図っているとのことであった。確かにショートステイ利用者の物品管理は家族とのトラブルが多く悩みの種であるが、人権無視もはなはだしいという思いに駆られた。私達は日々おしゃれを楽しんでいる。日本人は1人200着の衣類を持っているといわれるようにTPOに応じて、機能に応じてあふれるほどの衣生活を楽しんでいる。福祉先進国へ研修に行くとオムをつけた利用者が個性にあった洋服をおしゃれに着こなしている。女性の場合はアクセサリー類（ネックレス、イヤリング、指輪、ブローチ）を華やかにつけ、ヒールのある靴を履き、爪にはマニキュアをし、お化粧をしている。男性はアスコットタイなどで装いダンディで、介護を受けていてもなんらかわらない生活者を見ることが出来る。

私達は日ごろからファッションに敏感で、既製服はA体、B体、5号、7号、、、21号と日本人の体系を分析しつくして製図された多くの中から自分の体型や個性に合ったもの、TPOにあった着心地の良いものを選ぶことができる。しかし障がいを受けたり、介護が必要になると選べる物がほとんどなく、体にあうものがあればよいほうで柄やデザインは考慮しておれないのが現状である。被服は自己主張を表現する手段でもあるがそれも難しく、衣生活における憲法25条（健康で文化的な最低限度の生活）の保障が提供されていないといっても過言ではない。今回の研究の基になったのは筆者が1985年ごろ身体障害者療護施設に勤務していたとき、リウマチの中年女性利用者が、障

害に合った衣類がないことを嘆いていたときに相談に乗ったことです。彼女の要望は「冷えやすい下肢を保護できる優雅なロングスカートがはきたい」であった。しかし、立位不可能の彼女は着脱時やトイレ使用時には2人の介護者が必要であり、一人が抱きかかえて立位保持を行っている間に他の介護者がスカートをたくし上げ下着を下ろさねばならない。抱き上げている時間を少しでも短くするため、スカートをたくし上げる手間を省き、介護者への負担を少なくするためにズボンを着用していた。気兼ねや遠慮でファッション性の高い衣類は購入しにくい。同等の理由で、ウエストがベルトになっているズボンやスカート、フアスナー開閉のズボンやスカートはそれを回避する為、ウエスト総ゴムのものを選んでいく。彼女の要望に対して少し工夫をするとリウマチの方でも着用しやすくファッション性を追求した衣類を考案することができた。戦後の『もんぺ』の手法で作成し重宝してもらった。15年前、介護教員として教鞭をとり始めたときその経験を基に被服の授業担当者に障害者の為の衣類の視点を伝えたがなかなか理解されず、授業に反映することがないまま10年ほど過ぎた。2003年本学にて専攻科を担当するにあたり、被服担当の教授に筆者の障害における被服の視点を伝えると早速授業にその視点を反映させていただけた。改良着を学生が工夫し、一人一作品作り、学園祭で発表することが出来た。その後、筆者はズボンについてもいくつかの点で車椅子利用者の不便さを感じ、不便さの解消を試みた作品を考案した。今回高間由美子氏とともに、その考案を基に身体障害者療護施設の利用者に着用していただき考察を行なった。

### 改良スカートのコンセプト

着脱がしやすく、ファッション性、保温性がある。

対象利用者

＊下肢機能不全、車椅子使用

＊スカートの着用方法 洋式トイレ使用時に介護者が2人で行う（一人の介護者が立位を保持し、他の介助者がズボンや下着の着脱を行う）

## 改良スカートの長所

- \* 袴形式採用による腰部の介護負担の軽減
- \* 利用者の羞恥心への配慮－陰部の辺りの露出をなくす
- \* 介護者への不潔予防－ズボンを下げたときに抱きかかえている介護者に陰毛が触れお互いに不潔である。
- \* ファッション性の追求（切り替えてギャザーをいれる）

スカート着用の様子(前)

気に入ったスカートが  
穿けてうれしいわ！  
切り替えのギャザーも  
うれしいわ！



(横)

きれいに撮ってね！

ヒップがちょっと  
きついかしら



(後)

KFさんは  
後ベルトを先に止めました



## 改良ズボンのコンセプト

対象利用者

- \* 下肢機能不全、匍匐移動
- \* 常時車椅子使用

## 改良ズボンの長所

- \* 臀部、膝部の切り開き製図 臀部、膝部への圧迫の軽減
- \* 切り開き製図で、臀部、膝部に余裕が出来、後腰部及び足首の露出防止による保温効果
- \* 足首までのズボン丈確保によるゆとり感

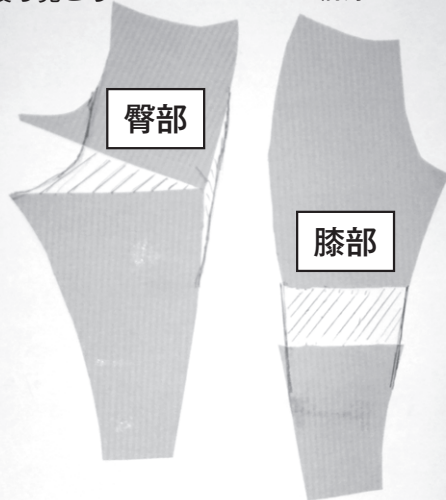
ズボン原型



切り開き図(斜線部分がゆとりになる)

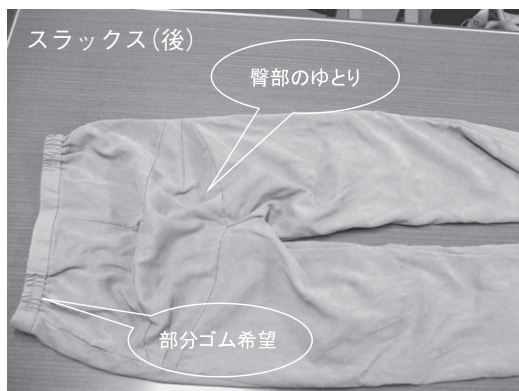
後ろ見ごろ

前身ごろ





上図は腰部のみを長くした図である。臀部のゆとりが出来ない為、常時座位にて生活する障害者の特性をとらえた改良になっていない。



## 調査用紙

評価項目	自立状態	年月日	良い	普通	悪い	備考
起床						
座位保持						
起立						
立位保持						
歩行						
階段昇降						
車椅子移乗						
車椅子移動						
手に持つ						
足に踏す						
腰まで上げる						
引き・フラスター						
脱衣						
便座向きまで移動						
トイレ動作						
便座に座る						
ズボン・スカートをはく						
入浴						
脱衣						
色						
デザイン						
長さ						
ゆとり(大きさ)						
着せ勝手						
脱ぎ勝手						
感想・意見						
総合評価						

## 調査方法

2008年12月協力依頼のための施設訪問し、主旨を説明し理解を得る(倫理的な配慮も含め)入所者の中で条件に合致した入所者を選定してもらい本人の了解を得て被験者4名決定する。

被験者の好みの聞き取り調査(色、材質)をおこなう。言語障害のある利用者は介護者の仲介を得て本人の希望する衣服を決定する。

ズボンの着用者・・・MMさん、TSさん  
スカートの着用者・・・AYさん、KFさん  
採寸の実施

四肢麻痺のため、介護者が抱き上げている間に計測をする。下肢の曲がり具合を考慮しながらの計測は難しいが、計測結果を製図に反映させることが作品の良否に繋がるため重要である。

布の購入

- ・材質…普段着として機械洗濯、機械乾燥を行なうのでそれに耐えること
- ・本人の好みの色への考慮
- ・伸縮性に富み動きやすさを助長できる布地
- ・季節(秋、冬)を考慮した材質



### 衣服製作

製図を高間由美子氏、縫製A野B氏  
衣服の完成

完成したズボンを見て筆者は唖然とした。縫製者への説明不足と連携ミスが如実に現れていた。A野B氏は障害者の被服を作成した経験がないため一枚布で裁断せず切り開き図の通りにをわざわざ切り替えて縫い目を作っていた。見本に渡したズボンは既製ズボンを使用し切り開き部分を別布で足して解りやすくし、ゆとりの必要性を示し、学生に試着させる為のものであった。その見本のままを裁断し、臀部、膝部ともに2箇所ずつ縫い目ができていた。その縫い目は違和感や褥創の原因となるとの評価が出ることは分かっていたが、とりあえず試着をしてもらった。

### 試着

2009年3月試着依頼のために施設を訪問し、調査項目に基づき以下の内容も考慮しつつ記入を依頼する。

更衣動作の機能性と介助の効率性の検証  
各々のADLの問題点の抽出  
改良点の検討

MMさん（女性63歳）ズボンの試着結果  
ADLの状況

- ・立位：不可
  - ・歩行：不可
  - ・座位姿勢保持：可
  - ・着脱：全介助
  - ・移動：電動車椅子自力操行
  - ・移乗：全介助
  - ・上肢機能：電動車いすのレバー自力操作程度
- 着用期間 2009年1月12日～25日（10日間）

### 長所

- ・臀部、膝部とも楽であり、色、素材ともに気に入っている。
- ・起居、座位保持時の使用感覚良好
- ・ウエスト部のベルトとボタンも気に入っている

### 短所

- ・介助者が抱き上げている間に他者が前ファスナーとボタンをかける為、介護負担が大きい（ゴムならば上げれば済む）

- ・臀部の切り開きと膝部のギャザー部分を切り替えたので膝が目立つデザインになり不満足（縫製ミス）
- ・匍匐移動の為、膝部の切り替えが下肢に当たり擦れて負担になる
- ・車椅子使用时、臀部2箇所の切り替えの縫い代が臀部を圧迫し負担になる
- ・ウエスト部分の前後はベルト、左右脇はゴムベルトであり、乾燥機使用のためゴムが伸びた場合入れ替えが不便（介護者の負担）

AYさん（女性58歳）スカートの試着結果

- ・立位：不可
- ・歩行：不可
- ・座位姿勢：保持可
- ・着脱：上着自力可、ズボン、パンツなどは一部介助
- ・移動：車椅子自力走行
- ・移乗：全介助
- ・上肢機能：普通

着用期間 2009年1月15日～30日の12日間  
長所

色・デザイン・長さ・大きさ気に入っている。

外出時のトイレ介助は後ろ部分のみ下げれば良いので露出が少なくプライバシーが守れる。本人、介護者ともに負担も少ない。

### 短所

腰部両脇がだらしく見えるのでファスナーにしたい。

上記にすれば後ろのマジックベルトは不要。

外出時のおしゃれに着用したいが日常生活にはズボンが便利である。

### 調査票記入例

AY さん : 1

[illegible]

AY さん : 1

[illegible]

KF さん（女性 54 歳）のスカート試着結果

- ・ 立位：不可
- ・ 歩行：不可
- ・ 座位姿勢保持：可
- ・ 着脱：上着自力可、ズボン、スカートなど一部介助
- ・ 移動：車椅子自力走行
- ・ 移乗：全介助
- ・ 上肢機能：普通

着用期間 2009 年 1 月 15 日～30 日の 11 日間  
長所

- ・色・デザイン・長さ・大きさ、はき心地良好
- ・プラットホーム型トイレ使用時引きずらず良好
- ・袴形式はトイレ介助時、後ろのみ下げればよいので便利である。

短所

- ・普段着としては着脱に時間がかかり不便である
- ・足からはく形式なのではきにくい（スカート交換時は広げたスカートへ移乗し着用できる巻きスカートが扱いやすいので前をオープンファスナーにして欲しい
- ・腰周りのサイズがぴったりだと脇が割れて見苦しい（サイズをを大きくし、脇が割れないようにする）

KF さん : 1

[illegible]

KF さん : 2

[illegible]

## 考察

①リ्यूマチ・下半身麻痺の方に考案したスカートを改良し製作した結果、試着後の不具合

を早く見出せ、更なる改良につながった。

② ADL の状態から被験者自身の衣服の扱い方や着心地、介護者も含め更衣動作における課題を探ることができた。

③被験者の更衣動作能力からみて衣服着脱の不便さが解決していないことがわかった。

④大きいサイズの衣服は着脱介助を行なうには便利であるが、利用者の体に合わないので、動きを難しくする。

⑤個別対応のオーダー衣服の必要性を感じた。

⑥言語障がい、知的障害のある利用者は聞き取り調査が困難な為一般的な仕立屋では対応が困難である。

⑦立位不可、振戦などの障がい者が採寸の困難さを招き採寸の技術を要する。

⑧第3者の援助の必要性（⑥、⑦の理由）があり、忙しい介護現場では多くの利用者の要望に応えた対応が難しい。

⑨利用者のおしゃれについての要望やファッション性追及は介護負担の増加を招くことが多い

## 今後の課題

今回の被験者の不具合を改良し、再度被験者に試着依頼をする。その後の ADL 状態に応じた更衣のしやすい衣服の考察を試みる。

・着用者にとって着やすく介助者にとっても着せやすい衣服の開発が必要である。

・着用者の気分の高揚を促すような衣服の提供と着用方法を探る。

・自分の好みの衣服が着用できる工夫を目指す。今回は障害者に焦点を当てたが、高齢者の衣服についても本人の個性を表現でき、機能性も併せ持った衣服の提供が少ない。高級ブティックは別として一般の高齢者の衣服に関しては、ジミジミとした柄のファッション性の乏しい衣類しか売られていない。従って経済力、機動力、活動力、行動力の低下している者が被服を選択する場合手近にあるそれを着用するしか方法がない。ファッション性のあるおしゃれな衣類を着用すると【いい年をして】など地域によっては集団への受け入れがなされない場合さえある。たとえば、母が田舎から筆者の家(岐阜)へ遊びに来るときはおしゃれな服装でくる

が、自宅にいるときはファッション性の乏しい前述のような服装である。あまりの落差に笑うと地域では俗に言われている「ファッション性の高い衣服」を着用すると浮いてしまい、仲間に入れてもらえないと言っていた。自分の着用したい衣服を自分で選ぶことは着用者の自己決定を尊重することに繋がるし、他者から注目されることにより心の張りや生活の活性化に繋がる。またそれを通して判断力や思考力の保持や涵養にもつながる。障害を持った者も、高齢者も身体機能が低下している人もその人らしい衣生活が送れることは心身ともに健全な生活を送る一翼を担うことになると思う。

## 終わりに

利用者が望む衣服は介護者の介護労力増大の原因になることが多くある。在宅介護の場合は個人対応の為、援助を望めるが、入所施設で多数の利用者がそれを求めた場合訴えの少ない利用者にしわ寄せが行くことも考えられる。双方にとってよりよいものを考案することの必要性を痛感した。

## 謝辞

この研究を県立陽光園の施設長様を始め利用者様、木下和子様のご協力を得ました。また、名古屋学芸大学の高間由美子氏と共同で行ない、紀要をまとめるに当たり専門的示唆をいただき、心より御礼申し上げます。

共同研究者 名古屋学芸大学の高間由美子氏

協力施設 岐阜県立陽光園

調査協力者 岐阜県立陽光園 木下和子氏

## 参考文献

・岐阜県製品技術研究所研究報告

2000 NO1

・バリアフリー製品の研究（第3報）山内寿美

2001 NO2

・ユニバーサルフアッションの研究 山内寿美

2005 NO6

・被服の実需対応型生産システムの確立 山内寿美

・皆に優しい介護服 岩波君代